

# 藍染めの工程

先月藍染めとインディゴ染めの違いを調べましたが、今回は藍染めの工程を紹介していきます。歴史ある藍染めを一緒に勉強していきますましよう。

## 藍の染料作り

### 1 藍床

藍の色素を含む植物の葉と茎に分けます。葉は、乾燥させたものに水をかけながら、筵(むしろ)で被い、発酵させます。これを「すくも」つくりといい、藍色に染める原料になるものです。この床を寝床とも呼んでいます。発酵熱でむんむんし、藍の葉はだんだん黒くなり、独特の匂いが鼻をつきます。発酵する藍に何度も水を打ち、20回以上の切り返しを行います。「すくも」のをつくりまします。染め着きがよく、品質がよい藍のすくもをつくるにはこのときの発酵熱の管理が大事で、藍職人の長年の経験とカンが必要になってきます。

### 2 藍つき

藍の発酵がおわると、臼でついて粘りをだし、餅のようになるまで搗きます。これが「すくも」です。

れ1セチらのにめ天でか、玉つこを0んくい玉丸て日乾し藍を

### 3 藍を建てる

藍麩(あいがめ)に藍玉を入れ、水、ふすま(小麦粉の皮)、石灰を加えて染液をつくりまします。藍玉を溶解し、還元されて藍液として使用できる状態になると、青い液から青緑味をおびた黄色い液「菜種色」と称する色に変化します。このように藍の世界では還元された菜種色の藍液に仕上げること「藍を建てる」といいます。

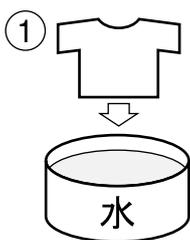
### 4 藍の管理

藍は生きています。毎日攪拌(かきまぜ)して空気を入れます。職人は毎日、藍の機嫌をみます。藍が元気な状態になると、息を吐いているように藍の華(泡)が表面に浮いてきます。これは藍が生きている証拠です。藍の機嫌が悪い時は、藍が弱っているときです。酸性が強くなり、色は緑がかり、匂いは甘く、華も少なくなりまします。このような状態のときは、石灰を入れて中和させ、もとの状態にもどします。藍液の色や匂いをみて藍の機嫌がわかるのは、職人の長年の経験とカンです。

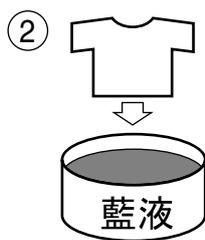
### 5 藍の管理(火入れ)

霜が降りる季節になると、藍液の温度を15度前後に保つために火で暖めます。

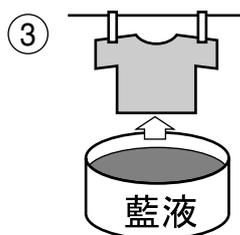
## 染める工程



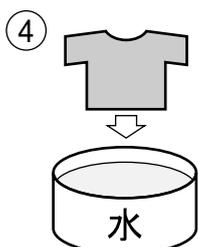
① 染めムラ防止のために水に布を入れ、膨潤しておきます。



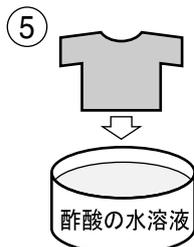
② 布を藍液の中へ静かに浸け込みます。静かに布を繰り返しながら布どおしが引っ付かないように均一に漬け込みます。



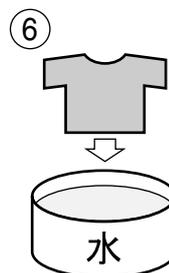
③ 布を藍液から引き上げて、空気酸化を30分間位行い、発色させます。空気酸化とは、ただ単に布等を広げて、全体を空気に触れさせるだけです。最初は黄色ですが、徐々に藍色になってきます。



④ 3.4.を希望の濃度になるまで繰り返した後、水洗いする



⑤ 酢酸90%を水1リットルに10cc加えた液に5分間程度漬け込み、引き上げ、染色で付着したアルカリ成分を中和します。



⑥ 十分に水洗いする。

PRIVATE

